

学校のなかのジェンダー

河野 陽子(クロスカルチャー3年)

・はじめに

社会のいたるところには、いまだに性差別が残っている。家庭、職場、法律など、日常生活のいろいろな場面でそれに気づくことができる。そんな中で、「学校」は一般に男女平等が実現されている世界だと認識されているようだ。学生時代は性差別に気づいていなかったが、就職してから実感したという話はよく聞く。しかし、学校教育を注意深く観察してみると、男女平等は原則となっはいるけれども、必ずしも達成されているというわけではなさそうだ。人間の考え方や行動の仕方の根本となる「教育」の場で、学校や家庭は重要な意味をもっている。もしも、特に公的な場である学校で、性差別が存在し、子どものジェンダー意識形成において役目を果たしているとしたら、これは見逃せないと思った。今回は一見男女平等に思われている学校での性差別、「隠れたカリキュラム」という問題について考えてみたい。

1. 教科書に見るジェンダー

先日、ある小学校で教科書を閲覧させてもらう機会があった。長崎市の小学校で使用されている教科書をジェンダーの視点からいくつか紹介しようとおもう。

生活科1,2年 (東書)

写真が教科書のほとんどを占めるが、男子・女子ともにほぼ均等に写っている。

出勤する母を見送る父と子ども

- ・ ランドセルの色(男子は黒、女子は赤)
- ・ 女の子はほとんどスカートをはいている
- ・ 働く人の姿・・・ほとんどが男性

家庭科5,6年 (開隆堂)

母親、父親(女子、男子)が家事をする姿はほぼ同じ頻度で登場する。

- ・ 家族で食卓を囲んでいる写真、絵・・・父親が中央にいる場合が多い。母親が中央というのはほとんどゼロ。
- ・ 共働きの家庭が紹介されているが、家事は誰がするのかという問題を、おばあちゃん(手助け)を登場させることによって解決している。

保健 (学研)

- ・ 服の色… <女子> ピンク、赤 <男子> 緑、青 が多い
- ・ ランドセルの色
- ・ 思春期…女の子が鏡を見ていることはあっても、男の子の場合はない
- ・ 性器について
 - 男性の性器 (本文)「…(働き)… 命のもとである精子がつくられる。」
(写真)精子(命のもと)
 - ↓
 - 女性の性器 (本文)「…(働き)… (対応する記述なし)」
(写真)卵子(命のもと)

国語 (光村)

- ・ 著作者…男性が約9割を占める
- ・ 主人公、登場人物…男性、動物のオスが約8割を占める
親子の話でも父と息子が中心(母の登場はほんの少し)
- ・ 男性像…活発、力強い、物知り、仕事で帰ってこない
- ・ 女性像…家事、やさしい、ほがらか、後ろからそっと見守る
- ・ 家族…「男は仕事、女は家庭」の昔からのイメージ

社会 (日本文教出版)

男子、女子ともに「～さん」と記述

- ・ 「～さんの話」…<仕事について>男性 <生活について>女性
- ・ 貿易の仕事の図…注文は女性が受け、外国で交渉するのは男性
- ・ 議会、議員のイラストは圧倒的に男性が多い
- ・ 基本的人権…平等権のところで、男女には触れていない

【歴史】

- ・ 武士や貴族のような男性の姿の中で、女性は田植えをやっているところのみ。
古墳作り、農民のつとめなどの場面に男性しか登場していない
- ・ 政治や戦争の記述、権力を持った男性が多い
- ・ 登場する女性…卑弥呼、北条政子、津田梅子たち、与謝野晶子、
富岡製糸場の和田英 (日記)

「男性中心の社会」

(ただでさえ簡単な説明のみで終わっている女性の説明が、「ゆとり教育」でさらに

削減されるのではないか。)

教科書の特徴をまとめるとすれば、一部の教科を除くとほとんどが男性優位の世界となっており、ステレオタイプ化されたジェンダー・イメージであふれているということだ。ここでジェンダーの意識が形成されていくのだ。

今回は小学校の教科書のみを調べたのだが、このような教科書における性差別は中学、高校でも続き、学年が上がるにつれてその傾向は強くなるようだ。これでは「男はこう」「女はこう」という固定的な考え方を、無意識のうちに生徒たちに植え付けている可能性がある。生活科や家庭科において男女を平等に扱う努力をしても、国語や社会科で女性の存在を無視したり、性による固定的な役割分担を描いたりしては、それらの努力が無意味なものになってしまう。どの教科においても男女が平等に扱われたときはじめて、教科書のジェンダー形成の機能がなくなったといえるだろう。

2. 技術・家庭科の男女共修、体育の別修

以前は中学、高校では、男子は技術科、女子は家庭科というように男女別々に授業が行われていたのだが、女性差別撤廃条約により、1993～94年にかけて中学、高校でこれら2教科の男女共修の必修化が開始された。

しかし、問題はまだ残っている。この技術・家庭科は一部選択できるようになっており、「文部省は選択制を設けることによって男女別の適正コースの存続を計っていると云わざるを得ない」(『学校文化とジェンダー』p.32)。選択は個人の自由である。が、果たして男女は異なる役割を担うものだという意識を伝達していないと言えるだろうか。実際、わたしの通った中学校でも技家は一部選択が行われ、その結果、技術系は男子が、家庭系は女子が圧倒的に多かったのを覚えている。

技術・家庭科では表面的には男女平等が打ち出されている一方、いまだに男女が別々の授業を受けているのが中学以後の体育である。体育は身体的な要素が重視され、体力や能力の面において男女に「差」が出るのは、まぎれもない事実だ。だから別修は仕方ないことだと考えることができる。

しかしこの差というのは、あくまでも男女の平均を見て言っているものであり、スポーツ能力には個人差がある。一般の男性以上に優れた能力をもつ女性はたくさんいるのだ。しかも注意しなくてはならないのは、ここでいうスポーツ能力が明らかに男性が基準となっているという点である。近代スポーツは、筋力や瞬発力など、男性が生理学的に有利な「能力」や「体力」を基準に作られていて、競争や勝利することに重点がおかれてきた。これは学校における体育教育にもいえることで、そういった能力の差ゆえに競争に勝つことができない者にとって、体育の授業はしばしば苦痛であるかもしれない。

これからはこのような競争ではなく、身体を動かして楽しむような競争のないスポー

ツ、たとえば生涯スポーツのようなものを特に学校では取り入れる必要があるのではないか。また、競技をするにしても男女の力が均等となるようなチーム編成をするなど、工夫を加えれば体育の男女共修の実現は可能なはずだ。わたしのような「運動嫌い」も今までよりは少なくなるだろう。

競争や勝利を前提としないスポーツは、ジェンダーや年齢による差別・区別を必要としない。
(『女性学・男性学』 p.73)

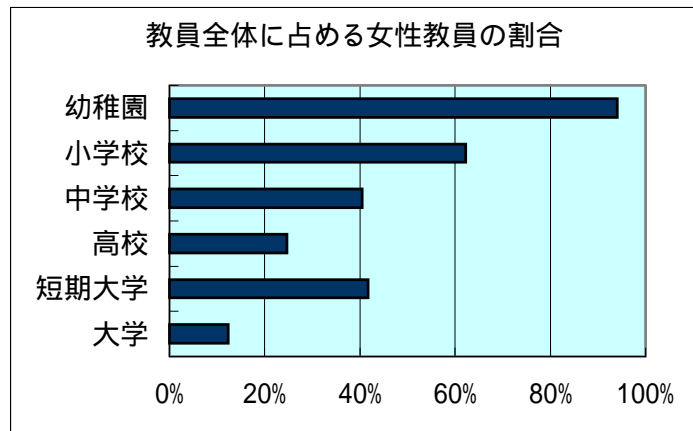
3 . 性教育

わたしが高校までに受けてきた性教育といえば、性器、性交、性病、避妊についての授業を思い出すが、この中の性器教育がしばしば男女の性器の「違い」を強調しすぎているという声がある。実際わたしも大学の教養科目ではじめて、男女で異なる性器は「もともとはひとつのものが分かれたのであって別々のものではなかったし、どちらとも判別しかねる中間の形の性器をもつ人さえある」(『両性の平等と学校教育』 p.196)ということを知った。この説明もせずただ性器の違いだけを強調しては、「男と女はちがう」という意識を補強しかねない。また別の面では「どちらとも判別しかねる中間の形の性器をもつ人」を傷つけ、悩ませることになってしまう。違いを教えることも大切だが、むしろ男性の性器はもともと女性のそれであること、完全に男性の性器になっていないものをもつ人もいることを強調すべきではないだろうか。

また性教育では「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」(「性と生殖について、精神的・身体的健康が確保されること/自己決定権が確立されること」)の視点、「性同一性障害」と呼ばれる人たち承認(多様性の認識)も重要である。さらにセクハラ、ドメスティックバイオレンスなど、近年社会で取り上げられている性の問題にも目を向け、これらを入権問題として考えていかなければならない。以前までは隠され、表に出ることがほとんどなかったセクハラやDVが間違っているものだとわかったのなら、そのことを教育の場でしっかりと伝えていく必要があるだろう。

4 . 教員の性差別

幼稚園から大学まで、教員の性別を見てみると、そこには明らかに男性優位の世界がある。右の図からもわかるように、短大を除けば幼稚園から大学まで、女性教員の比率は減少し続ける。小学校では女性教員が多いが、低学年から高学年へ学年が上がるにつれて教員の方が多くなる。学校における女性管



(1998年)

理職の割合も同様に、小学校校長の13.8%、教頭22.5%（98年）から、中学、高校と上がるにつれてその数字はさらに減る一方だ。このような教師社会が子どもにどんな影響を与えるだろうか。「トップは男性、女性はその下」という意識に縛られ、女子の場合には自らの達成意欲を制限してしまうことがある。これは成功を恐れる「成功不安」の状態をつくりだしたりもするという。

次に、中学以降の教科における教員の性別の偏りも見逃せない側面である。小学校までは担任の教師がほとんどの教科をひとりで教えていたのが、中学校に上がると教科ごとに先生がかわる。現状では主に家庭科、国語、英語は女性教員が、社会、数学、理科は主に男性教員が担当する傾向がうかがえる。これは生徒にステレオタイプ的な教科イメージを抱かせることにつながりかねない。さらに教師自身も進路指導では「男の子は理系に向いているだろう」、「女の子だから文系の方が無難だ」などという偏見がまだまだ抜けきれていないようだ。それも手伝ってか、男子も女子もほぼ変わらない割合で大学に進学してはいるものの、専攻分野に男女の偏りが生じており、男子向き、女子向きの色付けがなされている。そしてこの意識は職業選択においてもつきまとうのである。

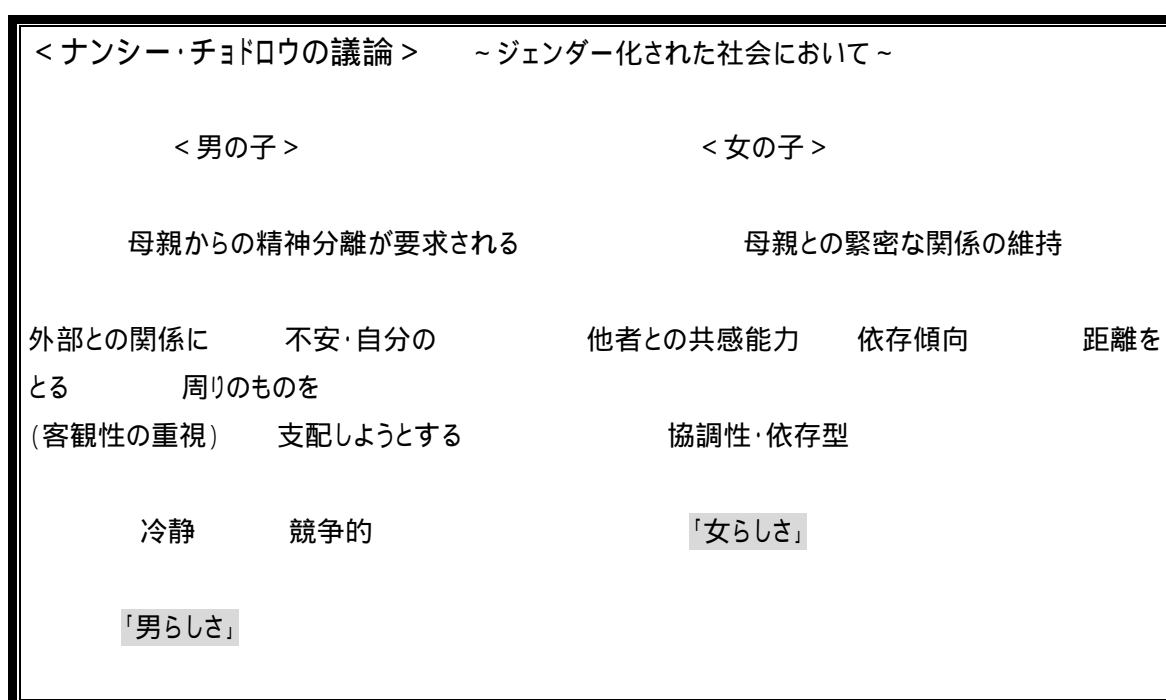
5 . 教室のなかのジェンダー

教室には2つの世界がある。活発に行動する男子の世界と、何もしていないでいる女子のそれだ。
(『学校文化とジェンダー』 p.101)

サドカー夫妻がアメリカで多くの学校を観察してこう述べているが、これは日本の学校にも当てはまる。授業中、男子は全般に活発に自己主張をしているが、その傍らで女子は沈黙して目立たない。木村涼子によれば、教師の側も女子からの少ない挙手を極力見

逃さないようにしてはいるものの、この「男子の〈雄弁〉と女子の〈沈黙〉」(『学校文化とジェンダー』 p.100)の構図にはほとんど変化が見られないという。「この点について児童や教師に対するインタビューで浮き彫りになってきたことは、女子の発言や行動に対する男子集団の攻撃的・嘲笑的対応の蓄積、さらには「先生は男子よりも女子に好意的だ」という、教師に対する男子集団の批判によって形成されてきた面があるということである。(同前 p.103)そういうわけで、女子は発言をあまりしなくなるようだ。

では、なぜこのように男子(男性)は攻撃的なのか。わたしはここで、ナンシー・チョドロウの議論を思い出さずにはいられない。「男女の気質の違いも幼児期のコミュニケーションにおいて作られたもの」とする解釈である。



これは母親が育てることが前提だが、幼稚園の先生は94%が女性ということから(98年)家庭はもちろん保育所、幼稚園でも行われていないとはいえない。小学校に入る前に幼児がこのように育てられるとするならば、教室での男女の支配・被支配の関係は必然ではないだろうか。そしてこの育て方自体ジェンダー意識に基づくものなので、どこかでこのステレオタイプを拭い去らない限りジェンダーは再生産し続けられることになる。

・ おわりに

今回は学校におけるジェンダー形成について話を進めたが、一見平和で安全そうな学校でしばしば性による決めつけに基づいて教育が行われるというのは、本当に恐ろしいことだ。が、これでも以前よりはだいぶ改善されている。中学家庭科の共修では問題はあるけれど、男子も女子も固定的なものの見方のために普段はやらないような「異性の仕事」をする機会が与えられる。たとえば裁縫なんて一度もやったことのない男の子が実は器用だったりして、裁縫に対する見方が変われば性的役割意識も変わるきっかけとなるだろう。また、小学校の家庭科や生活科、理科の教科書において、固定的なジェンダーによる役割分担がほとんどなかったことは喜ばしい点である。

ジェンダー・フリーを進めていくうえで重要となるのは、やはりこれからの社会を作っていく子どもたちの教育だと思う。教育が人間のものの考え方を形成する。教育次第で人はどうにでもなるのかもしれない。その教育をするのは学校であり家庭であり、社会である。だから社会全体があらゆる分野に真の男女平等に向けて、現在の男性中心社会を根本から見直し、意識改革をしないとジェンダー・フリー教育はできない。さらに教育の恐ろしいところは、物事を口で子どもに教える以外にも、子どもは親や先生から無言のメッセージを受け取っているという点だとわたしは考える。それは思想や信条だったりするだろう。だから特に子どもと接するときには、いつも男女平等、そして男・女ではなくそれぞれが違う人間として人を見る意識をもっていなければならない。ジェンダー・フリー教育はまず最初に、自分も含めて社会に生きる人たちの意識改革(教育)からはじめるべきものだとは強く実感している。

今回のレポートでは、本当は日本と北欧の教育を、ノルウェーの教科書『男女平等の本』を使って比較してみたのだが、残念ながら注文が間に合わず、それに日本だけでもこのように不十分な内容で、外国のことにはまったく手がつけられなかった。次のゼミ発表では、今回できなかったノルウェーの教科書についてやりたいと思っている。

<参考文献>

伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子、『女性学・男性学』、有斐閣、2002年

木村涼子、『学校文化とジェンダー』、勁草書房、1999年

橋本紀子、村瀬幸治、和田章子、中島みさき、『両性の平等と学校教育』、

東研出版、1999年

井上輝子、江原由美子 編、『女性のデータブック 第3版』、有斐閣、1999年

伊藤公雄、牟田和恵、『ジェンダーで学ぶ社会学』、世界思想社、1998年